



Title	近江の雪野山古墳・安土瓢箪山古墳の被葬者とその性格：四道将軍の派遣を補佐した有力氏族の首長墳
Author(s)	小笠原, 好彦
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 215-240
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105043
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

近江の雪野山古墳・安土瓢箪山古墳の被葬者とその性格

—四道將軍の派遣を補佐した有力氏族の首長墳—

小笠原 好彦

はじめに

近江は、その中心部に広大な琵琶湖をかかえる地域である。この琵琶湖の東に広がる湖東の地域は、その東は後の東山道の美濃や信濃へ通ずる地域である。また琵琶湖の東岸を北進すると日本海側に広がる北陸道の各地へとつながる地域でもあった。

日本の各地で農耕社会が発展し、それを統括し、最初に統一したのは大和政権であった。この大和政権の初期は、大和盆地の東南部に政権の本拠をおき、各地の地域を広域に統率する首長らと連合し、それを統括した政権であったと推測される。そして、その政権のもと、各地で築造された墳墓の前方後円墳は、それぞれの地域を統率する有力首長らが埋葬された首長墳と考えられている。

この大和政権の初期にあたる古墳時代前期に、近江で築造された前方後円墳に、湖東の地域に築造された安土瓢箪山古墳がよく知られている。この安土瓢箪山古墳は、1935・36年（昭和10・11）に発掘された全長130mを越える大型の首長墳である。後円部には埋葬主体部として3基の竪穴式石室を設けており、その中央の石室から銅鏡2面、鍬形石1個、車輪石1個、石釧2個などの碧玉製腕飾り、大刀、剣などが副葬されていた。これらの副葬品には、銅鏡や碧玉製腕飾りなど大和政権の中核部から入手したものも含まれており、大和政権と強い繋がりをもつ有力首長であった。

このように、近江の古墳時代前期の有力首長墳として、長く安土瓢箪山古墳が知られ、大和政権下の前方後円墳の代表例の一つとして注目されてきたといつてよいであろう。

しかし、1989～92年（平成元～4）、新たに同じ湖東で、古代の菰生郡のほぼ中心地域に南北にのびる雪野山丘陵に築造された雪野山古墳が発掘された。この雪野山古墳は、雪野山丘陵の南端部に築造された首長墳であることが明らかになった。しかも、後円部に設けられた竪穴式石室は、その天井石をほとんど失っていたが、これまで石室の内部は攪乱されることなく、埋葬時のままの状態であることが明らかになった。そして、この雪野山古墳の発掘によって、古墳時代前期に築造された湖東の有力首長墳の実態が新たに判明し、近江の湖東の有力首長の性格を考える拠り所を提供することになったのである。

ここでは、これまで知られていた安土瓢箪山古墳と、新たに発掘された雪野山古墳の発掘結果を加え、古墳時代前期に、近江の湖東に築造された有力首長墳の性格を、古代の文献史料である『古事記』『日本書紀』をもとに、少し検討を試みることにしたい。

1. 発掘された雪野山古墳と安土瓢箪山古墳

雪野山古墳は、近江の湖東地域、東近江市の西端部を南北にのびる独立丘陵である雪野山の南端部に築造された前方後円墳である。この古墳は、雪野山の最頂部に後円部、それから北北東部にのびる尾根に前方部を設けている。墳丘は後円部を2段に築成し、1段目の平坦面が北北東にのびて前方部の上面となっている。墳丘の斜面は葺石を貼りつけているが、自然の岩肌を削ったのみのところもある。墳丘には埴輪は据えていない(図1)。

埋葬部は、後円部の墳丘の平坦面のやや東寄りに、ほぼ南北を主軸とする竪穴式石室を設けている。この石室の墓壇は、下段は長さ8.6m、幅4.8m、上段は長さ10.6m、幅7mと2段に掘られ、床面に細かい砂利を敷きつめていた。竪穴式石室は、長さ6.1m、幅が北端で1.5m、南端で1.35m、高さは北端で1.6m、南端で1.4mで、幅も高さも北側が少し大きくなっている。

石室の壁は小さな割石を小口積みして構築している。下半部はやや内傾ぎみに積み、中ほどで一旦は積むのを止め、その後に上半部をほぼ垂直に積んでいる。壁面には一面に赤色顔料を塗っていた。天井石は南端に扁平な板石1枚が残っていたのみであるが、全体として10枚ほどを連ねて両側壁の上面を覆い、その隙間に粘土を貼っていたと推測されている。

また、石室の床面に木棺を据えるため灰色粘土による粘土床を施していた。木棺は大半が腐って消失していたが、部分的にコウヤマキ材が残存した。そして、粘土床の痕跡から、木棺は長さ5.6m、北端幅0.9m、南端幅0.8m、両端に半円状の縄掛突起を設けていた。この粘土床の断面は緩やかで舟底形をなしており、刳抜き式の舟形木棺であったと推測されている。また、棺内の2か所に仕切り板の痕跡も確認されている。

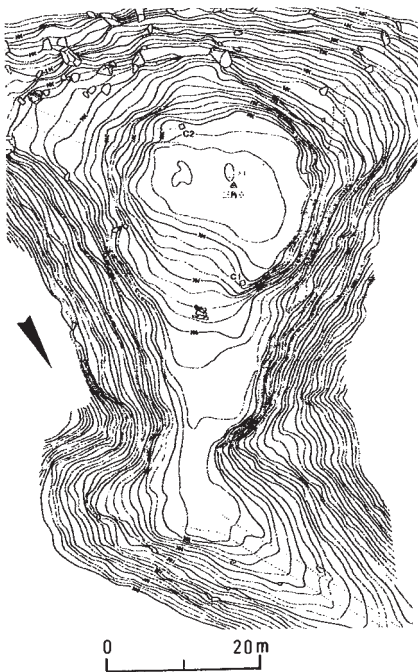


図1 雪野山古墳の墳丘

副葬品は、ほぼ原位置をとどめて検出されており

(図2)、木棺内の中央部から鉄剣と鉄刀が出土した。また遺体の頭部の北側で、銅鏡3面と鉄形石1個、琴柱形石製品1個(図3)が出土した。銅鏡は東に鼉龍鏡、西に三角縁波文帯鼉龍鏡、それらの南に内行花文鏡が置かれていた。また内行花文鏡の直下から琴柱形石製品1個、その西に鉄形石1個を配していた。さらに、これらの鏡群の北側から木棺の北端部にかけて銅鏃17本をふくむ靱、鉄製農工具類と紡錘車形型石製品が出土した。

また、遺体の足元と推測される位置に、仕切り板に立てかけた状態で三角縁天王日月唐草文帯四神四獣鏡、三角縁四神四獣鏡、その南側で鉄刀、鉄剣、ヤス、鉄鏃など。そして、木棺の南端部で、朱の入った壺形土器1個が置かれていた。

他に木棺外では、北小口の東から小札草綴冑1領、西側の北端付近から鉄槍1本、鉄剣2本、鉄鏃5本、銅鏃4本が出土した。また、その南で鉄鏃21本を入れた靱、南端付近で銅鏃34本が出土した。さらに、東側の棺外でも、北半から銅鏃18本と鉄剣2本、さらに中央部で鉄鏃4本、銅鏃4本などが出土している(都出ほか1996)。

このように、雪野山古墳の石室は、天井石をほとんど失いながらも石室の内部は攪乱されることなく、被葬者への多くの副葬品が遺存しただけでなく、埋葬時の状態をそのままとどめていたことが明らかになっている。

つぎに、この湖東に築造された古墳時代前期の前方後円墳に近江八幡市の安土町に築造された安土瓢箪山古墳がある。この古墳は、安土町の宮津に所在し、湖東の観音寺山の西麓、織山から西へのびる尾根の先端部に、丘陵を切断して築造されている。墳丘は北西へ向いて築造されており、全長134m、後円部径78mで、墳丘の段築は明らかでない(図4)。また葺石も明らかでないが、埴輪を配している。埋葬主体部は1935・36年(昭和10・11)に発掘され、後円部から中央石室、西北石室、東南

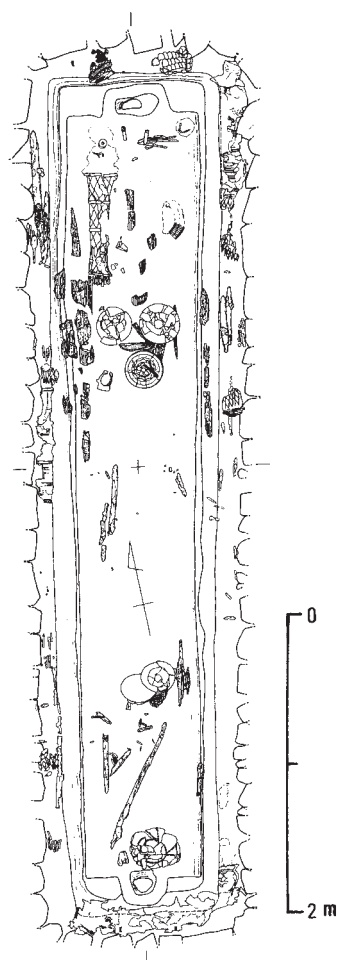


図2 雪野山古墳竪穴式石室の遺物出土状態

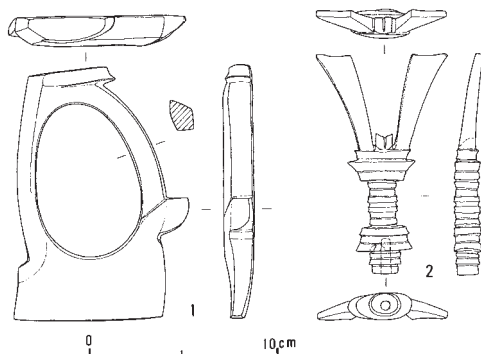


図3 雪野山古墳出土の鉄形石と琴柱形石製品

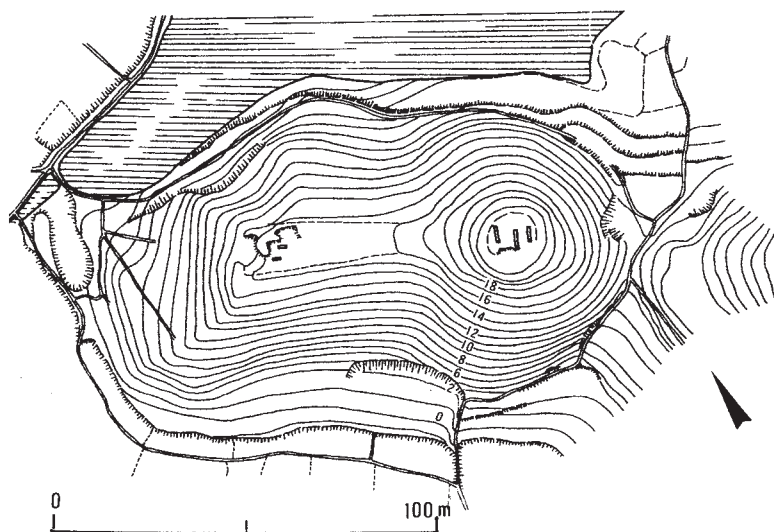


図4 安土瓢箪山古墳の墳丘

石室の3基の竪穴式石室、前方部から2基の箱式石棺が検出されている。

まず中央石室は、墓壇の底に薄く川砂利を敷き、その上に扁平な平石を並べる。その上にU字状に厚く積んだ粘土床を中央部に、その両側に薄く粘土を敷いた後、割石を小口積みによって長さ6.6

m、幅1.3m、高さ1.08mに構築した竪穴式石室である。

副葬品は、中央部から北へ少し寄ったところに、20数個の管玉、鍬形石1個、車輪石1個、石釧2個、夔鳳鏡1面、二神二獣鏡1面、短剣1本、また足下に短剣1本が出土した。また粘土床の外では、北東端部に短甲1領、鉄斧、鎌、異形鉄器、西の北半に、筒形銅器2本、大刀、銅鏃、鉈、直刀、短剣など、東側では直刀、長剣、銅鏃、鉄鏃などが検出されている（図5）。また、西北の石室からは、鉄斧2個、刀子1個などが出土したのみだった。また、前方部の箱式石棺から、石釧3個、勾玉3個、丸玉3個、管玉8個が出土している（梅原1938）。

以上のような雪野山古墳、安土瓢箪山古墳の二つの前方後円墳は、古代近江の湖東に築造された最古期の首長墳である。このうち雪野山古墳は、南北に延びる雪野山丘陵の南端付近の最頂部に築造されており、前方部は後世に少し改変されているが、それでも前方部が狭く、また撥状に開いていた可能性があるという。これに対し、安土瓢箪山古墳は、日野川下流の東方に広がる平野部の東端部に南北にのびる織山の西麓の小尾根に築造されている。墳丘は後円部に対し前方部が少し広がっている。そして、雪野山古墳には埴輪を配していないが、安土瓢箪山古墳は埴輪を配している。また副葬品では、雪野山古墳は三面の舶載鏡と二面の仿製鏡、安土瓢箪山古墳は、これまで二面とも舶載鏡とされてきたが、平縁二神二獣鏡は仿製鏡の可能性が少なくないとされており、いずれも舶載鏡と仿製鏡が副葬された可能性が高い。そして、福永伸哉氏によると、銅鏡の組み合わせと、安土瓢箪山古墳には中期から出土するものにつながる新しい鈕孔を含んでいるのに対し、雪野山古墳のものは新しい要素を含んでいないという（福永1996）。

また、鍬形石では、雪野山古墳のものは上の笠状部上端が左下がりで、左端に突起部がない。さらに右側の環状部につく突起部は上面を平端にし、大きく張り出し、内孔はD字状で下端が板状部にくいこんでいる。しかし、安土瓢箪山古墳のものは笠状部が平坦で、環状部の突起中央に刻線が入る。また環状部の突起は上下とも差がなく、O字状の円孔をなしている。これらの特徴の差異は、河村好光氏による鍬形石の形式変遷の研究（河村 1989）からすると、雪野山古墳のものは最古型式のもの、安土瓢箪山古墳は最新型式とみなされる。そして、この雪野山古墳の鍬形石を詳細に検討した北条芳隆氏によると、雪野山古墳のものは第1段階、安土瓢箪山古墳のものは第3段階のものとしている（北条 1996）。

さらに、甲冑では、安土瓢箪山古墳には方形板革綴短甲、雪野山古墳は小札革綴冑が副葬されている。そして、雪野山古墳の甲冑を検討した橋本達也氏によると、方形板革綴短甲と小札革綴冑が共存した例はほとんどないという。また、小札革綴冑は福岡県石塚山古墳、京都府椿井大塚山古墳など初期の古墳に副葬されているのに対し、方形板革綴短甲は、やや時期の下がる古墳に副葬される傾向があるとされている（橋本 1996）。

このように、ごく限られた二つの古墳の墳丘と副葬品をみると、雪野山古墳は湖東に築造された最古の首長墳であり、安土瓢箪山古墳は、それに続く首長墳と推測して間違いないものと思われる⁽¹⁾。そして出土した土師器からすると、雪野山古墳は布留式の中段階に築造されたものと理解されるであろう。

2. 雪野山古墳と安土瓢箪山古墳の被葬者

雪野山古墳は、湖東の日野川のすぐ東、南北にのびる雪野山丘陵の南端部の最頂部に築造された首長墳である。ここは琵琶湖岸とは少し離れており、古代蒲生郡のほぼ中央部に位置している。西に鏡山山麓にかけて広がる平野部、東は雪野山丘陵の東に広がる平野部、南に日野川流域の東岸に広がる平野部を眺望しうる位置に築造されている。この雪野山古墳の被葬者は、

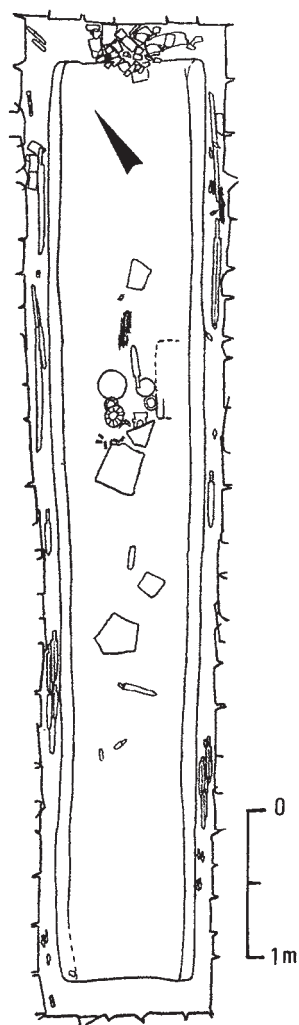


図5 安土瓢箪山古墳の中央竪穴式石室と副葬品配置

これらの地域を統率する基盤とした有力首長であったものと推測される。これに対し、雪野山古墳に続いて首長権を継承したと推測される安土瓢箪山古墳は、畿山の北端部に築造されている。ここは日野川の下流域の東に開けた平野部の東端部にあたり、細川修平氏が説くように、小中の湖、大中の湖の琵琶湖の内湖をふくみ、近江にとって重要な琵琶湖の湖上交通を掌握する地域である（細川 1993）。まさに、この安土瓢箪山古墳の被葬者は、琵琶湖の湖岸一帯を本拠とし、この湖東の地域一帯を広く開発を進め、統率する領域を大きく拡大した有力首長であったものと推測される。それだけに、安土瓢箪山古墳は、雪野山古墳の2倍の墳丘規模をなし、近江最大の規模をなす首長墳として築造されている。

さて、湖東の雪野山古墳と安土瓢箪山古墳の首長墳は、その築造された位置からみると、雪野山古墳の被葬者は、大和政権が成立した早い段階に、大和政権の中枢部と強い繋がりをもった有力首長であったと推測される。ここは美濃、信濃へつながる後の東山道と日本海側の北陸道と結ぶ交通路につながる最も重要な地域であり、そのような地域を本拠とした有力首長であったと推測される。それだけに、大和政権が成立した後の早い時期に、雪野山古墳の被葬者は、この地域の他の首長らに先んじて、大和政権の政権を担う中枢部の組織と深い繋がりをもつにいたったものと思われる。

また、安土瓢箪山古墳は、前述したように日野川下流域の平野部と琵琶湖の湖岸一帯を本拠とし、より広い地域の開発と陸路と湖上の交通をも掌握した有力首長であったと思われる。それだけに、雪野山古墳の有力首長に引き続き、東山道と北陸道への交通路と琵琶湖による湖上ルートを掌握し、さらに広い領域を統率した有力首長であったと推測される。そして、大和政権の中枢部とも、より強力な政治的な関係で繋がっていたものと推測される。

このような雪野山古墳、安土瓢箪山古墳の首長墳の被葬者は、日本の古墳時代には、いずれの古墳も墓誌を副葬する慣例がなかったので、これらの有力首長の氏族名を知ることは容易でない。とはいえ、これら二つの有力首長墳は、大型の前方後円墳を築造し、堅穴式石室に埋葬されている。しかも、大和政権との繋がりによって入手したと推測される銅鏡、碧玉製腕飾りなどが副葬されており、古代に作成された文献である『古事記』『日本書紀』に、二つの有力首長墳の被葬者に関連する氏族名が記されている可能性が少なくないと思われる。もとより、『古事記』『日本書紀』に記す推古朝以前の記載に対する信頼度の低さからすれば、これら『古事記』『日本書紀』に、湖東に築造された4世紀代の有力首長の氏族名を求めることには、自ずと異論がだされるであろう。しかし、『古事記』『日本書紀』に記された伝承記事に、なお事実がふくまれている可能性を考慮しながら、それを考古学の資料によって検討を試みることは許容しうることを考え、以下、あえて検討を進めてみることにしたい。

まず、近江湖東の雪野山古墳に埋葬された被葬者に対し、『古事記』『日本書紀』の古代文献にその史料を求めると、『古事記』上巻に、天照大御神と速須佐之男命の誓約によって生まれ

た神として、

次天津日子根命者、凡川内国造、額田部湯坐連、茨木国造、倭田中直、山代国造、馬来田国造、道尻岐閉国造、周芳国造、倭淹知造、高市県主、蒲生稻寸、三枝部造等之祖也。

とあり、天津日子根命を祖先とする氏族として、「蒲生稻寸」が記されている。この『古事記』のみに記す蒲生稻寸は、「蒲生」と記すことから、後の蒲生郡とかかわりをもつ氏族と推測される。しかし、この「蒲生稻寸」と共に記す氏族を検討した大橋信弥氏によると、稲置は国造より狭い地域の首長であったこと、後の蒲生郡の東生、西生の郷を本拠としながら大和政権に従属したものと推測している。そして、各地の国造と同じように、より朝廷と密接な奉仕の関係をむすんでいたものと想定している（大橋 1996）ように、「蒲生稻寸」は、南北に長く延びる雪野山丘陵の一角を初めて統率した有力首長の氏族名として相応しい氏族名とみなしうる可能性が少なくないものと推測する。そして、銅鏡や鉄形石などを副葬しているので、初期の大和政権と深い繋がりをもった有力首長であったことは疑いないものと推測される。そして、この有力首長墳が雪野山丘陵の南端部に築造されたのも、この首長墳の被葬者の本拠とごく近い地に築造された可能性も少なくないであろう。

このように考えると、この雪野山古墳から南に眺望しうる日野川中流域には、弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡として、東近江市の蒲生町市子遺跡、堂田遺跡、田井遺跡、麻生遺跡などの集落遺跡が集中して営まれている。これらの遺跡の住居跡の検出はごく一部にとどまっているが、各遺跡からは古墳時代前期の土師器が多く出土しており（蒲生町 2000）、その立地条件からみても、雪野山古墳の被葬者の本拠として最も注目される地域である。

さて、雪野山古墳に続いてこの地域の首長権を継承した有力首長墳は、先に検討したように安土瓢箪山古墳である。この安土瓢箪山古墳は、近江八幡市の東方、安土町の東方に南北に延びる織山から西へ小さく張出した尾根上に築造された有力首長墳である。

この織山の西側一帯は、古代の蒲生郡の篠筈郷にふくまれる地域である。そして、この篠筈郷を本拠とする古代の有力氏族に関連する記事としては、『日本書紀』顕宗元年5月条に、市辺押磐皇子の暗殺に関連した倭^{やまと}宿禰が市辺押磐皇子の遺骨を埋めているところを教えた妹の老女の置目の功によって、氏姓の狭狭城山君を賜ったことを記している。

また、時代は少し下がるが、『続日本紀』天平16年（744）8月乙未条に、蒲生郡大領の正八位下の佐々貴山君親人と神前郡の大領の正八位下の佐々貴山君足人らが、紫香楽宮の周辺でおこった山火事の消火に尽力し、褒賞を受けたことを述べている。この湖東の蒲生郡の地域、また東に隣接する神前郡も古代には同族の佐々貴山君が郡司に任じられており、日野川流域から愛知川の西方一帯は、まさに佐々貴山君一族が統率していた地域であった。そして、この狭狭城山君の祖先と深いかかわりをもつ可能性の高い記事に、『日本書紀』孝元7年2月丁卯条に、

（前略）兄大彦命、是阿倍臣・膳臣・阿閉臣・狭狭城山君・筑紫国造・越国造・伊賀臣、

凡七族始祖也。

と記されている。この大彦命を祖先とする阿倍臣、膳臣、阿閉臣、筑紫国造、越国造、伊賀臣らと同族とする狭狭城山君は、その氏族名からみて、蒲生郡の篠筈郷を本拠とする氏族と推測して間違いのないであろう。また、この狭狭城山君は、前述した顕宗紀に記された倭岱宿禰置目の記事からみて、さらに古墳時代前期まで遡りうる可能性が高いものと推測される。そして、ここに築造された有力首長墳である安土瓢箪山古墳の被葬者も、この狭狭城山君を被葬者に推測して間違いのないであろう。

いま、安土瓢箪山古墳の被葬者を、あえて狭狭城山君に推測しうるとすると、前述した『日本書紀』孝元紀に記された阿倍臣ら七氏族が同族関係にあったとするのは、どのようなつながりによって、これらの各氏族と同族関係が成立したのだろうか。しかも、これらの同族とする氏族は、大和の阿倍臣と膳臣の他は、いずれも少し距離を隔てた地域を本拠としている。もとより、これらの同族関係は、擬制的な同族関係であったとはいえ、はたして、どのような契機によって、これらの七氏族の擬制的な同族関係が成立したのかを検討する必要があるであろう。

3. 狭狭城山君と阿倍臣との同族関係

まず、『日本書紀』孝元紀に記す大彦命を祖先とする阿倍臣以下の氏族の本拠をみると、阿倍臣と膳臣は大和、阿閉臣と伊賀臣は伊賀、狭狭城山君と越国造は近江と北陸道、筑紫国造は西国の筑紫を本拠とする氏族である。これらの氏族の本拠は、筑紫国造のみは遠く隔てた九州に、他は大和と伊賀、近江と北陸道を本拠としている。さらに、その本拠の位置をみると、大和政権の中枢部の大和を本拠とする阿倍臣と膳臣、その東に隣接する伊賀、また北陸道の入口に位置する近江と北陸道を本拠とする氏族から構成されている。

このように大彦命を始祖とする七氏族は、筑紫国造の他は、大和と東海道の入口、また北陸道の入口と北陸道の地を本拠とする氏族から構成されている。そして、この大彦命は、『古事記』孝元段に、

其兄大毘古命之子、建沼河別命者、阿倍臣等之祖。

と記されており、大毘古命（大彦命）は建沼河別（武渟川別）と父子の関係にあり、しかも阿倍臣らの祖先であることを述べている。

さらに注目すべき記事に、『日本書紀』崇神 10 年 7 月己酉条に、

詔群卿曰、導民之本、在於教化也。今既礼神祇、災害皆耗。然遠荒人等、猶不受正朔。是未習王化耳。其選群卿、遣于四方、令知朕憲。

と、崇神天皇が神々を祀ったので災害はなくなった。しかし、遠国に服属していない人々がいるので、群卿らを四方に派遣すると述べている。そして、同年 9 月甲午条に、

以_レ大彦命_ヲ遣_{ハシ}北陸_ニ。武渟川別遣_{ハシ}東海_ニ。吉備津彦遣_{ハシ}西道_ニ。丹波道主命遣_{ハシ}丹波_ニ。
と記し、大彦命を北陸へ、その子の武渟川別^{たけぬなかわわけ}を東海へ、吉備津彦を西道へ、丹波道主命を丹波へと、四人の将軍（四道将軍）を任命して派遣したとしている。

また、同 10 年 10 月乙卯朔条は、

詔_{シテ}群臣_ヲ曰、今反者悉伏_セ誅。畿内無_シ事。唯海外荒俗、騒動未_ダ止。其四道将軍等、今急發之。

と記し、畿内はすでに平定されたとし、さらに四道将軍を畿外のそれぞれの地域に派遣している。

そして、同 11 年 4 月己卯条は、

四道将軍、以下平_シ戒夷_ノ之状_ヲ奏焉。

と、四道将軍が、それぞれ担当した地を平定した様子を奏上したとしている。

さらに、この四道将軍に関連し、『古事記』崇神段では、大毘古命（大彦命）を高志道に、その子の建沼河別命（武渟川別）を東の十二道へ、また日子坐王を旦波国へ派遣したと述べている。そして、大毘古命（大彦命）は命令のままに高志国に進み、また東へ派遣されていた子息の建沼河別命（武渟川別）と、相津で出会ったので、そこを相津（会津）と呼んだという。そして、それぞれ派遣された国を平定する任務をはたし、天皇に奏上したと述べている。

このように、大彦命を北陸道へ、またその子息の武渟川別を東海道へ四道将軍として派遣したと述べているのは、もとより伝承であるとしても、初期の大和政権にとって、東国での支配する版図の拡大と治定は、きわめて重要なことであつたであろう。

ところで、初期の大和政権による、このような将軍の派遣に関連する、その後の記事を見ると、『日本書紀』崇峻 4 年（591）11 月壬午条に、紀男麻呂宿禰・巨勢猿臣・大伴嚙連・葛城烏奈良臣を大將軍とし、各氏の臣や連を副將軍や部隊長とし、2 万余の軍を率いて筑紫へ出兵している。さらに、『日本書紀』推古 8 年（600）是歳条に、

是歳、命_{シテ}境部臣_ヲ為_ス大將軍。以_テ穗積臣_ヲ為_ス副將軍。

とあり、境部臣を大將軍、穂積臣を副將軍とし、1 万余の軍を率いて新羅に派遣したとする記事がある。

これら二つの軍を派遣した記事では、軍の編成は、大將軍を任命するとともに、それを補佐する副將軍を伴って派遣している。そして、このような派遣する軍の編成からすると、崇神紀の大彦命を北陸道へ、武渟川別を東海道に派遣したという四道将軍の際も、『日本書紀』『古事記』はともに記載していないが、派遣した地域が遠いだけに、副將軍、もしくは副將軍的な複数の人物を伴って派遣した可能性が高いのではないかと推測する。

このように推測すると、北陸道へ派遣された大彦命は、その出入り口を本拠とする近江の狭狭城山君と北陸道の越国造を副將軍の任務を担わせて派遣した可能性が高いのではないかと推

測する。また、一方の東海道へ派遣された武渟川別の場合も、この東海道への出入り口の伊賀を本拠とする伊賀臣・阿閉臣に副將軍の任務を担わせたのではないかと推測される。さらに大和を本拠とする膳臣こそは、大彦命、武渟川別いずれかかの副將軍に任じたのではないかと推測される。

そして、一方の西道や丹波へ將軍として派遣された吉備津彦や丹波道主命の場合も、東国へ派遣された將軍の大彦命・武渟川別と同様に、副將軍の任務を担った人物を伴って派遣したのではないかと推測する。

そして、このような大彦命、武渟川別による北陸道、東海道への派遣では、『古事記』景行段、『日本書紀』景行紀に記す日本武尊による東国での平定に対する艱難辛苦の活動からみると、これと同様の苦難を重ねながら平定する使命をはたしたものと推測される。その結果として、『日本書紀』孝元7年2月丁卯条に記すような大彦命を祖先とする、阿倍臣・膳臣・阿閉臣・狹狭城山君・越国造・伊賀臣らによる擬制的な同族関係が成立することになったものと考えられるのである。

以上のように、筑紫国造を除く6氏族が、阿倍臣の祖先とする四道將軍の一人の大彦命とともに北陸道へ、また大彦命の子息の武渟川別とともに東海道へ派遣されたとすると、これらの大彦命を祖先とする擬制的な同族関係を有したとする氏族の本拠に築造された有力首長墳には、このような東国への派遣が副葬品などに反映していないかどうか、いま少し検討を試みることにしたい。

4. 東国へ派遣された氏族と有力首長墳

まず、四道將軍として派遣されたという大彦命と武渟川別を祖先とする阿倍臣は、現存する「阿部」の地名から、大和東南部の桜井の地を本拠にしていたと推測される有力氏族である。これまで、この桜井の地域に築造された古墳時代前期に築造された有力首長墳に、大彦命と武渟川別の古墳の探索を試みたものに、塚口義信氏による研究がある（塚口1997）。

塚口氏は、大彦命と武渟川別を埋葬した有力首長墳として、桜井市のほぼ中央部の東側の外山に築造された古墳時代前期の桜井茶臼山古墳と少し西側に築造されたメスリ山古墳に推測する。二つの大型古墳のうち、桜井茶臼山古墳は全長208m、後円部径110mで、南向きに築造された前方後円墳である（図6）。この古墳は1949・50年（昭和24・25）に埋葬主体部の竪穴式石室が発掘調査されている。石室は長さ6.8m、幅1.1m、高さ1.6mのもので、床面に木棺の底板が残っていたが、すでに盗掘されていた（図7）。そして原位置をとどめる遺物は少ないながら、石室北辺の木棺と壁との間などから、内行花文鏡5片、神獸鏡11片、鍬形石1個、石釧1個、玉葉3個、玉杖形石製品4本、五輪塔形石製品1個、勾玉1個、管玉6個、鉄製剣3本、銅鏃2本、鉄鏃多数、鉄製工具などが出土している。築造時期は4世紀初頭に推

測されている（上田ほか 1961）。

一方のメスリ山古墳は、桜井市の西の大字高田に築造された大型墳で、全長 224 m、後円部径 128 m、墳丘を西向きに 3 段築成した前方後円墳である（図 8）。埋葬主体部は、主室と副室の堅穴式石室が設けられていた。主室の堅穴式石室は長さ 8.2 m、幅 1.3 m、高さ 1.6 m のもので、盗掘されていたが、それでも主室の副葬品として内行花文鏡 2 面、神獸鏡 1 面、鍬形石 2 個、石釧 29 個、車輪石 1 個、合子などが出土している。また副室は長さ 6 m、幅 0.7 m、高さ 0.7 m の堅穴式石室で、玉杖形石製品 4 本、儀仗用の鉄弓 1 本・鉄製矢 5 本、銅鏃 236 本、石製鏃 50 本、槍 212 本以上など大量の武器が副葬されている。築造時期は 4 世紀前半に推測されている（伊達ほか 1977）。

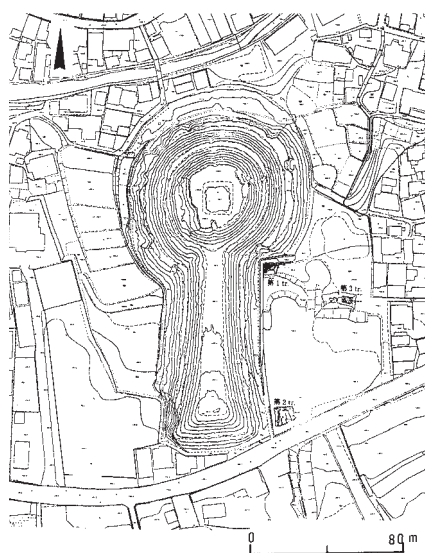


図 6 桜井茶臼山古墳の墳丘

これらの桜井茶臼山古墳・メスリ山古墳に対する塚口氏の考えによると、二つの大型首長墳などが築造された桜井の地は、6 世紀以前に遡る天皇陵を築造したという伝承がない。また王権の祭祀にかかわる巫女の伝承もほとんどないので、ここに所在する大型首長墳を大王墓に推測するのは難しいとする。そして、この地域に築造された桜井茶臼山古墳、メスリ山古墳の被葬者を、初期の大和政権内で最高の地位にあった廷臣的な人物に推測する。その初期の大和政権で著しく功績のあった人物として、『古事記』『日本書紀』に記された大彦命と武渟川別に注目し、その二人を被葬者に推測している。

二人のうち大彦命は、孝元天皇と皇后の鬱色迷命（『古事記』では内色許売命）との間に生まれた皇子で、崇神天皇の叔父にあたる。武渟川別は、『古事記』孝元段に、「其兄大毘古命之子、建沼河別命者、阿倍臣等之祖。」とあり、大彦命の子息と伝える。そして、『日本書紀』崇神 10 年 9 月甲午条には、大彦命を北陸へ、武渟川別を東海へ、吉備津彦を西道へ、丹波道主命を丹波へ四道将軍として派遣している。また、同年 10 月乙卯朔条は、畿内には服属しないものはいないが、畿外は服属しないものがあるので、四道将軍を派遣したことを記している。さらに、同崇神 11 年 4 月己卯条に、四道将軍が地方を平定した旨を奏上したことも述べている。

一方また、『古事記』崇神段では、大毘古命（大彦命）を高志道へ、建沼河別命（武渟川別）

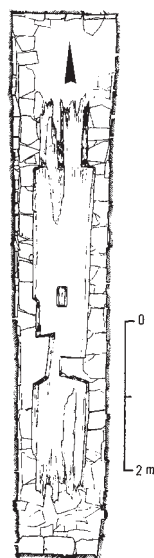


図 7 桜井茶臼山古墳の堅穴式石室平面図

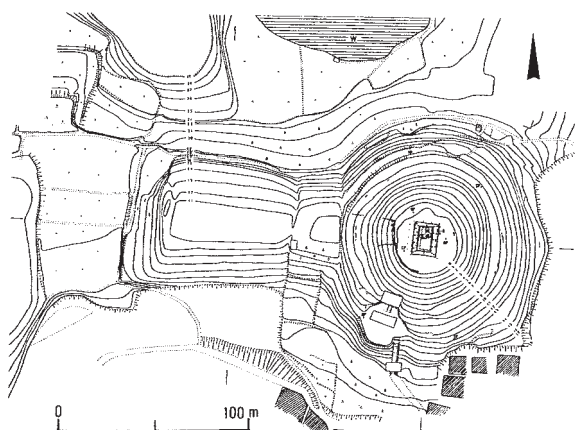


図8 メスリ山古墳の墳丘

山古墳の被葬者を大彦命、またメスリ山古墳を武渟川別の奥津城に推測している。そして、これら二つの首長墳は、いずれも桜井市の中央部に築造されており、築造年代が4世紀前半であり、二つの首長墳の築造年代に一世代の差があること。また、塚口氏は、メスリ山古墳では特に副室から儀仗用の鉄製弓1本・鉄製矢5本と銅鏃236本、石製鏃50本、鉄製槍212本以上など、じつに多量の武器類が出土しており、武人的な人物であったと推察し、これらは大彦命、武渟川別の年代や人物と一致するとしている。

それまで桜井茶臼山古墳に対しては、その規模からみて、大王墓に推測する考えもだされていた（上田ほか1961）。しかし、塚口氏が桜井茶臼山古墳、メスリ山古墳の被葬者を、大彦命、武渟川別に推測したことは、じつに斬新な考えを提示したものであった。

この塚口氏による桜井茶臼山古墳の被葬者を大彦命、メスリ山古墳を武渟川別に推測する論拠は、桜井の地は阿倍臣の本拠であり、そこに築造された大型前方後円墳であること。ここは王陵が築造された伝承がないので廷臣とし、メスリ山古墳からは、じつに大量の武器類が出土しており、四道將軍の大彦命・武渟川別の年代および人物像と一致することをあげている。

しかし、このような塚口氏による考えは、一つの斬新な見解としてだされたが、これまで十分に支持されてきているとはいいい難いように思われる。また、この考えには、なお説得力をもつ論拠を十分に提示しえていないようにも思われる。

そこで、桜井茶臼山古墳、メスリ山古墳に対し、大彦命、武渟川別の奥津城であるとする塚口氏の見解には、さらに十分な論拠を加える必要があるであろう。それには、『日本書紀』崇神7年9月甲午条には、大彦命を北陸へ、武渟川別を東海へ、吉備津彦を西道へ、丹波道主命を丹波に派遣したとする記述に続く、つぎの記事をより重視する必要があるであろう。それには、

因以詔之曰、若有不受教者、乃率兵伐之。既而共授印綬、為將軍。

を東の十二道へ、日子坐王を旦波国へ派遣したとしている。そして、大毘古命（大彦命）と建沼河別命（武渟川別）の父子は相津で出会ったので、そこを相津（会津）と呼んだことも述べている。

さらに、塚口氏は、『日本書紀』孝元7年2月丁卯条に、大彦命が、阿倍臣・膳臣・阿閉臣・狭狭城山君・筑紫国造・越国造・伊賀臣の7族の始祖であると記すことにも言及し、桜井茶臼

と記されていることである。すなわち、天皇は、もし教えに従わない者には兵をもって討てと述べ、それぞれの将軍に印綬を授けたとしている。ここでは、天皇が、四道将軍の派遣に際し、地位、身分、権限を示す印綬を授けたと述べていることに注目する必要がある。この印綬の印は官職を示し、その印に紐を佩びている。しかし、4世紀の未だ文字が使用されていない日本の古代社会では、天皇による将軍への印綬の授与は相応しいものではないであろう。おそらく将軍らは印綬ではなく、それに相当する身分・地位や権限を象徴するような威信財を授与されたのではないかと推測する。

そこで、これに相当する威信財を求めると、後の『続日本紀』大宝元年（701）5月己卯条では、遣唐執節使に任命された粟田真人に、文武天皇は節刀を授けている。また、『続日本紀』養老元年（717）3月乙酉条は、元正天皇が遣唐押使の多治比県守にも節刀を授けている。そして、同養老2年（718）12月甲戌条は、唐から帰朝した県守は、節刀を返上したことを記している⁽²⁾。また、この節刀は、『養老軍防令』節刀条に、

凡大將出_レ征、皆授_二節刀_一。

と、大將は出征に赴く際は節刀を授けることを述べている。さらに、『続日本紀』和銅2年（709）3月壬戌条に、陸奥・越後の蝦夷が危害を加えているので、巨勢麻呂を陸奥鎮東将軍、佐伯石湯を征越後蝦夷将軍、紀諸人を副将軍に任じており、将軍には節刀と軍令を授けている。

ところで、桜井茶臼山古墳の竪穴式石室は、盗掘されていたが、それでも前述したように、内行花文鏡5片、神獸鏡11片、鋌形石1個、石釧1個、玉葉3個、玉杖形石製品4本、五輪塔形石製品1本、勾玉1個、管玉3個、鉄製剣3本、銅鏃2本、鉄鏃多数、鉄製工具などが出土している。しかし、これらの武器類には節刀とみなしうるものは見だし難い。

またメスリ山古墳でも、主室は盗掘されていたが、副葬品として内行花文鏡2面、神獸鏡1面、鋌形石2個、車輪石1個、石釧29個が出土している。また、副室には、玉杖形石製品4本、儀仗用の鉄製弓1本・鉄製矢5本、銅鏃236本、石製鏃50本、鉄製槍212本以上の武器類が副葬されていたが、やはり節刀と認定できるものは明らかでない。

このように節刀は検出できないが、このメスリ山古墳の副室からは、注目すべきものとして、鉄芯もしくは木芯に管玉状の石製品を連結し、翼状の頭部あるいは十字形飾りをつける儀杖形石製品が2本ずつ出土している（図9）。これらと同様の玉杖形石製品は、桜井茶臼山古墳でも、鉄芯に碧玉の管玉を連結し、上端にT字形の碧玉をつけたものが4本以上副葬されており（図10）、きわめて重視すべき副葬品と思われる。そして、これらの儀杖形石製品は、まさに玉製の儀杖であり、印綬もしくは節刀と同様に、天皇から授与された身分・地位、権限を象徴する威信財に相当するものと推測される。そして、これらを所持することによって、天皇の全権を代行して執行することを対外的に認めさせるレガリア的なものだったのでないかと考える。

いま、このように儀杖形石製品を理解しうるとすると、桜井茶臼山古墳では4本以上、メス

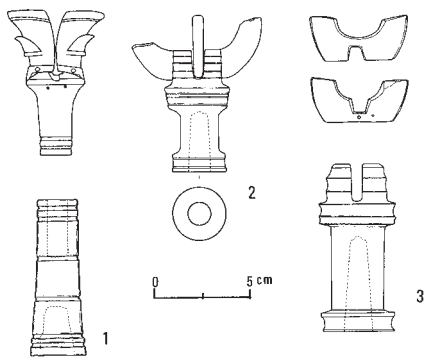


図9 メスリ山古墳の副室
出土の儀仗形石製品

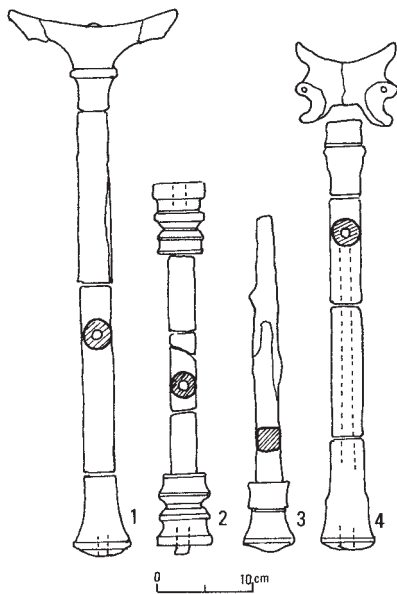


図10 桜井茶臼山古墳出土の
儀仗形石製品

リ山古墳に4本が副葬されていた玉杖形石製品こそは、天皇から軍事的な全権を授与された将軍であることを、内外に具体的に示す威信財ではないかと思われる。そして、このように複数本の玉製の優れた威信財を副葬していた桜井茶臼山古墳とメスリ山古墳の被葬者は、『古事記』『日本書紀』に記すように、天皇から四道将軍として北陸道、東海道へ派遣された人物であったと推測して間違いないであろう。これに加えて、塚口氏が述べたように、大量の武器類がメスリ山古墳の副室に副葬されていたことは、メスリ山古墳の被葬者が武人であったことを傍証するものというべきであろう。

このような阿倍氏の本拠に築造された全長 200 m を越える桜井茶臼山古墳、メスリ山古墳の大型首長墳は、いずれも墓誌が副葬されていないので断定はできないまでも、すでに塚口氏が被葬者名を提起したように、四道将軍として派遣された大彦命と武渟川別を埋葬した奥津城と理解して疑いないものと考ええる。

ところで、前述したように玉杖形石製品をレガリア的な威信財と考えると、桜井茶臼山古墳では少なくとも4本以上、またメスリ山古墳でも4本が副葬されていた。このことは、被葬者は、いずれも複数回にわたって将軍に任命され、そのつどその身分・地位、権限などを象徴的に示す威信財を授与されたものと推測される。そして、これらの玉杖形石製品

は、将軍とともに任地へ派遣を命じられた兵士らに対する軍事的な行為に対する任命権、また一方では、派遣先での同盟関係の締結、あるいは服属する対象となった各地域の首長らに対し、天皇の権限を託された将軍の身分・地位を立証する威信財として機能したものと推測される。

しかも、これらの玉杖形石製品は、『続日本紀』の遣唐大使に記すような節刀とは少なからず扱いが異なっていたのではないと思われる。その著しい差異は、これらの玉杖形石製品は、将軍としての使命・任務が終了したとき、その任命者に返上することなく、授与された者のものとそのまま保有され、その首長墳に副葬されていることである。すなわち、天皇もしくは国

家による職務の任命に際して授与された玉杖形石製品は、その使命が終えた後は、授与された者の実績あるいは功績を示す記念物として、そのまま所持されたものと考えられる。

このように桜井茶臼山古墳、メスリ山古墳に副葬された玉杖形石製品を理解すると、これらの有力首長墳は、まさに『古事記』『日本書紀』に記す四道將軍として派遣された大彦命、武渟川別の奥津城であることを実証するものとみなして間違いないであろう。換言すると、この玉杖形石製品の威信財には、人名こそ記されていないが、桜井茶臼山古墳、メスリ山古墳の被葬者は、塚口氏が提起したように、將軍として任じられた大彦命と武渟川別の地位・身分を具体的に証明する威信財と理解して疑いないといつてよいものである。

以上のように、桜井茶臼山古墳、メスリ山古墳を、阿倍臣の有力首長を埋葬した奥津城と理解すると、さらに阿倍臣と擬制的な同族関係にあったとする膳臣・阿閉臣・狭狭城山君・越国国造・伊賀臣らの本拠に築造された4世紀代の有力首長墳にも、北陸道、東海道の平定への派遣に関連する威信財が副葬されていないかどうか、いまいし検討を試みることにしたい。

まず、膳臣は大和を本拠とする氏族である。前述した『日本書紀』孝元7年2月丁卯条の他に、『日本書紀』景行53年10月条に、景行天皇が上総国に行幸した際、膳臣の遠祖である磐鹿六雁^{いわかむつかり}が蛤^{なます}の膾を天皇に供膳した功によって、膳大伴部を賜ったこと記載している。この膳臣は、『新撰姓氏録』左京皇別上に、天武12年(683)に膳臣を改めて高橋朝臣を賜わったことを述べている。この高橋朝臣への改姓は、膳臣の本拠の高橋の地名によるものと推測されている(佐伯1981)。この高橋の地は、『日本書紀』武烈即位前紀・仁賢11年8月条に、影姫の夫であった平群鮪^{へぐりのしび}が殺害された際に、影姫は

石の上、布留を過ぎて^{い ち か み} 薦枕^{こもまくら} 高橋過ぎ^{ものさは} 物多に^{おおやけ} 大宅過ぎ^{つまこも} 春日 春日を過ぎ^{つまこも} 妻隠^{つまこも}
 る^{おさほ} 小佐保を過ぎ^{たまけ} 玉筍には^{たまひ} 飯さへ盛り^{そは} 玉盃に^{かひ} 水さへ盛り^{かひ} 泣き沾ち行くも^{ひめ} 影
 姫あはれ

と詠んでいる。この歌では、大和東部の布留の地の北に高橋、その北に大宅、春日、小佐保の地名を入れて詠んでいる。天理市の布留の北の櫛本の地は、『東大寺要録』に「高橋川一井三池、右為_レ漑_二櫛本庄田_一穿也」とあり、現在は高瀬川と呼ぶ高橋川の流域一帯の地域が古代の高橋であったと考えられる。この高瀬川(高橋川)のすぐ北の丘陵地に築造された注目すべき有力首長墳に、1961・62年(昭和36・37)に発掘された大型古墳の東大寺山古墳が知られている(図11)。

この東大寺山古墳は、東大寺山丘陵の西端部の最高所に築造された北面する前方後円墳である。全長130m、後円部径80mで、埋葬主体部は後円部に主軸と平行に穿った墓壇に、長さ9m、幅2.6～3.1mの粘土槨を設けていた。この粘土槨の両端は盗掘で破壊されており、副葬品も少なからず失われたものと推測されるが、それでも粘土槨の北端部付近から、副葬品として鍬形石26個、車輪石23個、石釧2個、石製埴12個、石製台付埴1個、鍬形石製品40個、筒形

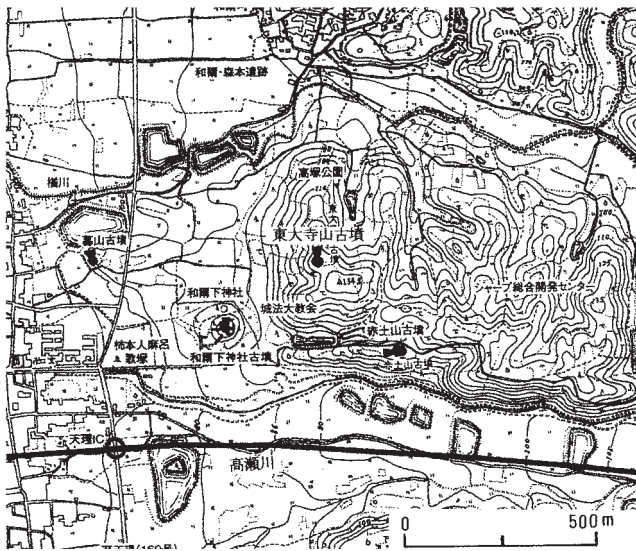


図 11 東大寺山古墳の位置と高瀬川（高橋川）

銅器 1 個、勾玉 7 個、管玉 47 本、棗玉 5 個が出土している。また粘土槨と墓壇との間にも多くの武器・武具が副葬されており、東側から鉄刀 3 本、飾付青銅製環頭付大刀 5

本、素環頭大刀 6 本、剣 2 本、槍 3 本が副葬されていた。これらのうち飾付青銅製環頭付大刀の 1 本に「中平年」を錯銘したものがふくまれていた。また西側でも鉄刀 4 本、素環頭大刀 1 本、剣 6 本、槍 7 本が副葬され、さらに東西に分けて銅鏃 261 本、鉄鏃 62 本も副葬されていた（図 12）。築造時期は 4 世紀末に推測されている（金関ほか 2010）。

この東大寺山古墳は、岸俊男氏によって、この地域を本拠とする和邇氏に対する研究が公表され（岸 1960）、また和邇下神社が近くに所在することもあり、和邇系氏族を被葬者とする考えがほぼ通説となっている。

しかし、この東大寺山古墳は、古代の高橋の地に築造された有力首長墳である。また、1997 年（平成 9）には、この古墳の北に所在する願興寺跡の発掘で、7 世紀第 1 四半期に遡る軒丸瓦が出土している（岡林 1997）。この 7 世紀第 1 四半期には、ここに氏寺を造営しうる和邇系氏族は想定し難く、出土した 7 世紀第 1 四半期に遡る軒瓦は、ここを本拠にした膳臣が建てた氏寺に葺かれた可能性が高いものである。そして、ここに築造された東大寺山古墳も同様に、遡る 4 世紀後半に膳臣の本拠の高橋に築造された有力首長墳で、その被葬者は、対外的な活動にも関与した膳臣の可能性がきわめて高いものと思われる（小笠原 2020）。

このように、これまでの通説と異なり、東大寺山古墳の被葬者を膳臣に推測すると、この首長墳では粘土槨の北端付近に、鍬形石・車輪石・石釧など 51 個に及ぶ多量の碧玉製腕飾りが副葬されている（図 13）。また木棺の外に素環頭大刀 7 本・鉄刀 7 本・鉄剣 8 本・槍 10 本・

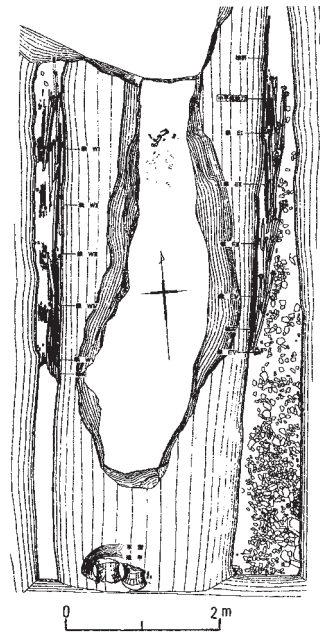


図 12 東大寺山古墳の埋葬施設と副葬品

銅鏃 261・鉄鏃 62 本
など多量の武器が副葬
されており、武人で
あったことも疑いない
ものである。とりわけ、
後述するように、碧玉
製腕飾りが多量に副葬
されていた点をここで

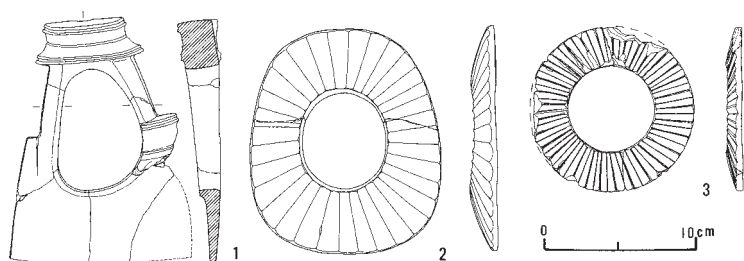


図 13 東大寺山古墳出土の碧玉製腕飾り

は重視する必要があるであろう。

つぎに阿閉臣と伊賀臣は、大和に東接する伊賀を本拠とする有力氏族である。これらのうち伊賀臣は、伊賀国伊賀郡を本拠とする有力氏族に推測される。天平 3 年（731）『伊賀国正税帳』に名張郡々領正八位下の伊賀朝臣果安とあり、伊賀臣は名張郡をも勢力圏にしている。この伊賀臣の本拠に築造されたと推測される注目すべき有力首長墳に、伊賀市才良に所在する石山古墳がある。

この石山古墳は、前方部を南西に向けた全長 120 m、後円部径 70 m の前方後円墳である（図 14）。1948～51 年（昭和 23～26）に発掘され、後円部から主軸に平行して西南を向く東槨・中央槨・西槨の三つの粘土槨が検出されている。これらのうち中央槨は長さ 9.5 m、幅 1.9 m、3 つのうち最も大きい、中央部は盗掘をうけていた。槨の北端に小札革綴冑を中心に農工具や石製模造品、また北側に巴形銅器をつけた盾が副葬されていた。また南端にも盾 1 面と石製模造品や農工具が副葬されている。また東槨は長さ 9.1 m、幅 1.5 m、槨の北部から巴形銅器をつける盾と鞆、これに入れていた銅鏃・鉄鏃、その南から多数の玉類、石製模造品が副葬されていた。さらに南半に長方板革綴短甲、草摺、弓などが副葬されている。また、東槨の東から盾 3 枚、東槨と中央槨の間から、盾 3 枚と多くの鉄族や銅鏃が出土している。

さらに西槨は長さ 5 m、幅 1.8 m で最も小さいもので、箱式木槨に推測されている。この槨内の北端から鍬形石 10 個、車輪石 38 個、石釧 13 個など 61 個におよぶ多量の碧玉製腕飾りと玉杖形石製品 2 本などが集積した状態で副葬されていた。また槨の南部から車輪石 6 個と石製模造品が集積して出土している（京大博物館 1993）。

このように、石山古墳では、中央槨に冑、盾などの武具、東槨に盾、鞆、銅鏃、鉄鏃、短甲など武器・武具が副葬されている。さらに、最も小さな西槨に、銅鏡 2 面とともに 67 個におよぶ多量の鍬形石・車輪石・石釧の碧玉製腕飾りと玉杖形石製品 2 本が副葬されている（図 15）のが注目される。

これらのうち、2 本の玉杖形石製品のの一つは、4 枚からなる羽根飾り状の装飾と頭部、棒状の軸と円盤状の下端部を別作りし、木製の柄と漆を用いて組み合わせた儀杖である。また他の

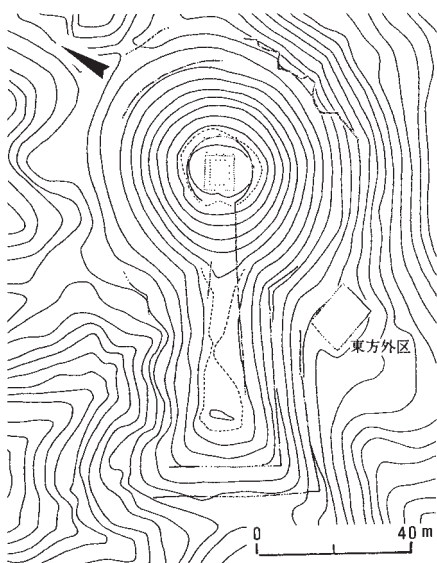


図 14 石山古墳の墳丘

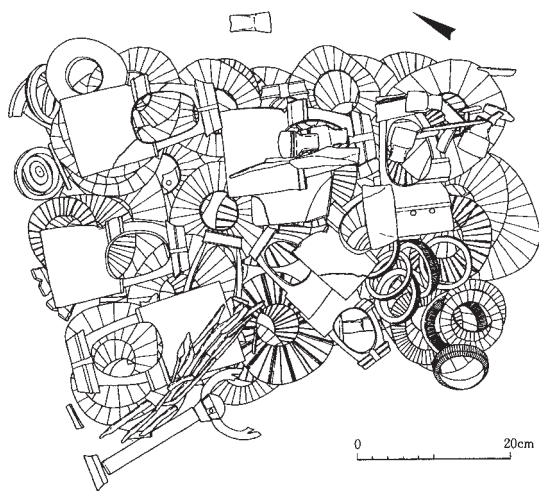


図 15 石山古墳・西粘土槨の碧玉製腕飾りの出土状況

一つは、V字状の上部に細い棒状の軸をつけたものである。前者の羽根飾り状のものは、メスリ山古墳の儀杖形石製品の十字状をなすものと類似し、後者もメスリ山古墳の頭部に翼状のものをつける儀杖と類似する。これら二つの儀杖は形状を異にするが、いずれも儀杖形石製品と呼称されているものである。これらは、前述した桜井茶臼山古墳とメスリ山古墳に副葬された儀杖形石製品とよく類似しており、儀杖と理解して間違いないものである。そして、これらの2本の玉杖形石製品は、桜井茶臼山古墳、メスリ山古墳のものと同様に、まさに身分・地位、また権限などを象徴的に示す威信財に推測して疑いないものである。そして、これらの儀杖形石製品は碧玉製腕飾りとともに中央槨、東槨ではなく、小規模な西槨に副葬されていたことの要因を明らかにする必要があるとはいえ、この石山古墳にいずれも副葬されたものである。

この石山古墳は、伊賀を本拠とする全長120 mの有力首長墳である。その規模は、四道将軍に任じられた大彦命、武渟川別に推測される桜井茶臼山古墳、メスリ山古墳の半分に近いものである。この墳丘規模と所在する伊賀の位置からすると、石山古墳

の被葬者は、玉杖形石製品2本が副葬されているとはいえ、桜井茶臼山古墳、メスリ山古墳の被葬者と同等の身分・地位や権限をもつ将軍と理解するのは難しいであろう。そこで、天皇もしくは国家から、あるいは軍事的任務をもった将軍から、将軍を補佐する副将軍に任じられた際に授与された威信財ではないかと推測する。このことは、大彦命もしくは武渟川別と深い繋がりがあった可能性がきわめて高いであろう。

つぎに、阿閉臣は、『日本書紀』雄略3年4月に阿閉臣国見、同顕宗3年条に阿閉臣事代が任那へ派遣、同推古18年条に大龍が来日した任那の使いの導者となったことを記している。

その本拠は、伊賀国阿拝郡に推測されている。現状ではその対象地に築造された4世紀代に遡る大型首長墳は明らかでない。

さらに、狭狭城山君は近江の湖東を本拠とする有力氏族である。この狭狭城山君が埋葬された可能性が高い近江の有力首長墳としては、墳丘、埋葬主体部、副葬品などを前述した雪野山古墳と安土瓢箪山古墳がある。二つの有力首長墳のうち、雪野山古墳は全長70m、埋葬主体部は竪穴式石室で、三角縁神獣鏡2面、内行花文鏡1面、鼈鏡1面などの銅鏡と鍬形石1個などとともに、琴柱形石製品の形状をなす玉杖形石製品1本が副葬されている（図3）⁽³⁾。その数は1本とはいえ、儀仗である玉杖形石製品が副葬されていたことは、きわめて重視すべきものである。

この雪野山古墳の墳丘は、全長70mで、前述した120mの石山古墳よりも小規模である。しかし、近江では最古期の古墳であり、桜井茶臼山古墳と近い時期に築造されたと推測される首長墳である。この雪野山古墳は、近江の湖東に位置し、北陸道の出入りに築造された首長墳である。そして、石山古墳と同様に、玉杖を示す玉杖形石製品の威信財も副葬されている。また棺内から30本、棺外から66本の銅鏃が副葬された武人である。このことは、この雪野山古墳の有力首長も、大彦命が四道将軍として北陸道の平定に派遣された際に、何らかの将軍を補佐する副将軍として派遣された可能性がきわめて高いものと推測する。

また、一方の安土瓢箪山古墳は、湖東の蒲生郡篠筍郷に築造された全長135mの規模をなし、近江で最大の前方後円墳である。墳丘、埋葬主体部は前述したように3石室あり、中央石室から夔鳳鏡1面、二神二獣鏡1面、鍬形石1個、管玉10数個、車輪石1個、石釧2個、短剣2本が出土した。また粘土床の外から短甲、筒形銅器、大刀、短剣、銅鏃、異形鉄器などが検出されている。墳丘は雪野山古墳の2倍の規模をなし、銅鏡、碧玉製腕飾り、武器・武具などが副葬されている。とはいえ、これらの副葬品には、玉杖形石製品はふくまれていない。しかし、注目されるものに、異形鉄器と呼称して報告された鉄器は、二枚の細板が長く縦にのび、その下部に細い茎を設けたものである。この鉄製品は、その形態からみると、石山古墳に副葬された玉杖形石製品のの一つである琴柱状のものと類似するように思われる。これも、材質は異なるとはいえ、儀仗の一形態であった可能性が少なくないように思われる。

以上のように、狭狭城山君に推測される二つの首長墳をみると、先行して築造された雪野山古墳は、琴柱状の玉杖形石製品が1本副葬されており、この威信財からみて、石山古墳と同様に副将軍の役割を担った有力氏族であったことは疑いないであろう。そして、雪野山古墳から首長権を継承した安土瓢箪山古墳の被葬者は、雪野山古墳の被葬者と同族もしくは擬制的な同族関係を有したかは明らかでない。しかし、安土瓢箪山古墳は、琵琶湖の南岸付近を本拠とし、後の篠筍郷に築造されており、狭狭城山君を被葬者に推測して間違いのない有力首長墳である。

このような雪野山古墳、安土瓢箪山古墳の二つの有力首長墳の被葬者は、大彦命が北陸道へ

四道将軍として派遣された際に、いずれも副将軍として補佐する任務をもって同行したものと推測して間違いないであろう。

つぎに、越国造の「越」は、『日本書紀』では「越」、また、『古事記』、『国造本記』には「高志」と記されている。そして、飛鳥京跡苑池から「高志利波評」と記載した木簡が出土しているので、古くは高志国造と記されたと推測されている。この越国造が統率した地域は、令制では前・中・後に分割した広がりをもった地域に推測される。この広い地域で4世紀代に遡る首長墳の候補に、能登半島の基部を扼する呂知地溝帯の中能登町の丘陵地に築造されている能登古墳群の小田中親王塚古墳がある。この古墳は、全長72mの帆立貝式古墳ともいわれ、竪穴式石室で三角縁神獣鏡2面、鍬形石1個が出土したと伝えている。また付近に全長72mの前方後方墳の亀塚も築造されている。さらに、西方の眉丈山に雨の宮1号墳、雨の宮2号墳が築造されている。このうち1号墳は全長70mの前方後方墳、2号墳は全長100mの前方後円墳である。いずれも、能登半島の交通の要衝に築造された首長墳であり、これらの首長墳が候補になりうるかもしれないが、なお候補にとどめざるをえないであろう（橋本1990）。

5. 擬制的な同族関係の実態

前章では、大彦命を祖先とする擬制的な同族関係をもつと推測される7氏族のうち、筑紫国造を除く6氏族の本拠に築造された4世紀代の有力首長墳に対し、その副葬品の検討を試みてみた。

その結果、まず阿倍臣の本拠に築造された桜井茶臼山古墳の被葬者は、200mを越す前方後円墳の規模、竪穴式石室、4本以上の儀杖形石製品、100面以上の銅鏡が副葬されており、四道将軍の一人として北陸道へ派遣された大彦命に推測して疑いないものである。また、メスリ山古墳の被葬者も、200mを越す前方後円墳で、竪穴式石室、4本の儀杖形石製品、多量の武器が副葬されており、四道将軍の一人として東海道へ派遣された武渟川別に推測して疑いないものと理解される。

つぎに、膳臣の本拠に築造されたと推測する東大寺山古墳には、鍬形石26個、車輪石23個、石釧2個という51個におよぶ多量の碧玉製腕飾りが副葬されていることが注目される。このような多量の碧玉製腕飾りの副葬は、伊賀臣の本拠に築造されたと推測した石山古墳の鍬形石10個、車輪石44個、石釧13個と、67個におよぶ多量の碧玉製腕飾りの副葬とじつによく類似している。この石山古墳には、多量の碧玉製腕飾りの他に、2本の玉杖形石製品が副葬されている。この玉杖形石製品は、将軍の大彦命に推測した桜井茶臼山古墳、また武渟川別に推測したメスリ山古墳のものと類似しており、これも天皇もしくは将軍から身分・地位や軍事に関連する権限の委任にかかわって授与されたと理解しうるものである。

しかし、前述したように、石山古墳は全長 120 m の規模で、200 m を越える桜井茶臼山古墳、メスリ山古墳の半分の規模であり、その被葬者は、同様に将軍とはいいい難いであろう。そこで、将軍を補佐する副将軍の任務を担って派遣されたものと推測されるであろう。

このように石山古墳の被葬者を副将軍に推測しうるとすると、同様に 51 個に及ぶ多量の碧玉製腕飾りが副葬されていた東大寺山古墳は、大和政権の中枢部に築造された有力首長墳である。しかも、この膳臣を被葬者に考える東大寺山古墳は、粘土槨の北端と南端が著しく破壊されていたことからすると、銅鏡および玉杖形石製品も副葬されていた可能性がきわめて高いのではないと思われる。そこで、この東大寺山古墳の被葬者も、石山古墳の被葬者に対して副将軍の身分・地位を推測したように、副将軍の任務を担って派遣されたものと推測して間違いないであろう。

このように推測すると、東大寺山古墳と石山古墳は、いずれも副将軍として、ともに多量の碧玉製腕飾りを保有・管理する任務を担って派遣されたものと考えられる。しかも、二人の副将軍が多量の碧玉製石製腕飾りを保有し、管理していたとすると、これらの副将軍の本拠からみて、伊賀の石山古墳の被葬者の伊賀臣は、武渟川別とともに東海道へ、また一方の東大寺山古墳の被葬者の膳臣は、大彦命とともに北陸道へ派遣されたと推測することができるものと思われる。

そして、これらの碧玉製腕飾りは、派遣されたそれぞれの地域の首長らと同盟関係の締結が成立したとき、もしくは服属した首長らに対し、将軍の指示によって下賜する役割を担ったものと推測される。しかも、石山古墳と東大寺山古墳に副葬された多量の碧玉製腕飾りは、その任務が終了した後は、将軍・副将軍の地位・身分を示す玉杖形石製品と同様に、そのまま戻すことなく、その残余はいずれも副葬されたものであろう。

このように、副将軍の任務を担った有力首長が、多量の碧玉製腕飾りを保有し、また管理していたとすると、より上位の任務を担った将軍は、その派遣に際して何を保有、もしくは管理したのだろうか。

そこで、改めて桜井茶臼山古墳の竪穴式石室の副葬品をみると、石室は盗掘されていたが、その出土品には内行花文鏡 5 面、神獸鏡 11 面が破片の状態ながら出土している。また、その後の 2009 年（平成 21）にも橿原考古学研究所によって再発掘が実施され、銅鏡 81 面が副葬されていたことが公表されていた。そして、その後の 2023 年（令和 5）9 月、さらに 103 面を越えるじつに多量の銅鏡が副葬されていたことが報告されている⁽⁴⁾。

また一方のメスリ山古墳は、主室の竪穴式石室は盗掘されていたが、それでも三角縁神獸鏡 1 面、内行花文鏡 2 面の破片が出土しており、桜井茶臼山古墳と同様に、多くの銅鏡を保有し、管理していた可能性が少なくないであろう。

さらに、メスリ山古墳の主室の副葬品では、主室に鍬形石 1 個、車輪石 1 個、石釧 30 個な

ど多量の碧玉製腕飾りが遺存しており、メスリ山古墳の有力首長は、これらの碧玉製腕飾りも保有し、管理していたものと思われる。さらに、副室には銅鏃 236 本、石製鏃 50 本、鉄製槍 212 本以上副葬されていたことからすると、まさに将軍として、武器の管理にも関与していたものと推測されるであろう。

以上述べたように、大彦命、武渟川別の将軍は、将軍の職務として多量の銅鏡を保有・管理し、また碧玉製腕飾りと武器の一部も保有・管理していたものと推測される。そして、複数の副将軍の 1 人に対し、多量の碧玉製腕飾りを保有・管理させたものと推測して間違いのないであろう。また、この銅鏡は、将軍の桜井茶臼山古墳の被葬者が多量に保有・管理したことからみて、碧玉製腕飾りより上位の威信財であったと理解して間違いのないであろう。

つぎに狭狭城山君の本拠に築造された近江の雪野山古墳にも琴柱形の玉杖形石製品 1 本が副葬されている。この雪野山古墳に副葬された玉杖形石製品も、同様に身分・地位を示す威信財と理解して間違いのない。そして、雪野山古墳の規模と、銅鏡、碧玉製腕飾りなど副葬品からみて、将軍の大彦命とともに北陸道へ派遣された副将軍の一人であったと推測して間違いのないであろう。

また安土瓢箪山古墳の被葬者は、雪野山古墳の被葬者から首長権を継承した有力首長で、雪野山古墳の被葬者と同じく、副将軍に任じられた有力首長であったと推測される。そして、大彦命、武渟川別による東国へ平定が終了したときに、大彦命を祖先とする擬制的な同族関係が結ばれることになり、この安土瓢箪山古墳の被葬者である狭狭城山君が加えられることになったものと推測する。

このように理解すると、四道将軍として大彦命、武渟川別の東国への派遣では、補佐する複数の副将軍が派遣されており、それには職掌・任務の分担があったものと理解される。また、その分担内容からすると、副将軍の膳臣、伊賀臣とその他の副将軍とでは、格差が内在したことも推測されるであろう。

ところで、擬制的な同族関係をもった阿倍臣以下の氏族には、筑紫国造も擬制的な同族関係をもつ氏族にふくまれている。九州の筑紫を本拠とする氏族なので、これまで大彦命、武渟川別による東国への平定とは関わりが少ないものと推測してきた。しかし、擬制的な同族関係をもつ氏族にふくまれていることからすれば、東国への派遣に何らかの関与があったのではないかと思われる。

この筑紫国造の本拠となった筑紫は、令制の筑前国と筑後国を併せた地域である。西は玄界灘に面し、朝鮮半島との出入り口に位置する地域である。この地域の 4 世紀代の有力首長墳を求めると、福岡県糸島市の一貴山銚子塚古墳がある。前方後円墳で全長 102 m、後円部に設けられた長さ 3.4 m、幅 1.4 m の竪穴式石室に、方格規矩鏡 1 面、内行花文鏡 1 面、三角縁神獣鏡 8 面、勾玉 2 個、管玉 33 個、環頭大刀 3 本、槍 14 本、鉄鏃 14 本などが副葬されている。

とりわけ同範関係をもつ三角縁神獸鏡など銅鏡 10 面が副葬されており、玉杖形石製品は副葬されていないが、じつに注目すべき有力首長墳である。そこで、この一貴山銚子塚古墳の被葬者である有力首長が四道將軍を東国へ派遣する際に、以下のようなかわりをもった可能性を考える必要があるように思われる。

それは、四道將軍として大彥命が派遣された北陸道、武渟川別が派遣された東海道の地域をみると、北陸道は大半、東海道は後の東山道の地域をもふくむとしても、やはり大半は海に面した地域である。これには、陸路のみでなく船で海路をたどって進むことも少なくなかったのではない。しかも、擬制的な同族関係をなす七氏族は、越国造と筑紫国造の外は、まったく海のない地域の有力首長で、海路を船で進む航海技術をもつ氏族をふくまないことになる。このような点からすれば、筑紫国造の有力首長墳に推測した一貴山銚子塚古墳の被葬者は、玄界灘の外洋に面する糸島半島の地をふくむ地域の有力首長である。ここは朝鮮半島とのつながりが深い地域だけに、高度な航海技術を身につける者を多く擁していたはずである。それだけに、大彥命、武渟川別による東国への派遣は、海路での漕運には、筑紫国造は不可欠な氏族だったのではないかと推測されるのである。

さらに、越国造との擬制的な同族関係の成立の意義に関連することがある。四道將軍が東国へ派遣された時期の越の地域は、令制では越前、越中、越後に分割された広い地域であった。この広い地域での移動と在地で多くの首長との同盟関係の締結や服属の進展には、この地域に通じた有力氏族の協力なしには困難なことだったであろう。また、それだけでなく、越国造の本拠とする地域は、在地で産出する緑色凝灰岩による玉類や碧玉製腕飾りの生産地でもあったことが重視されるであろう。東大寺山古墳、石山古墳に多量に副葬されていた碧玉製腕飾りは、いずれも越国造の地で生産された威信財であった。この越国造からは、碧玉製腕飾りと玉類が国家へ恒常的に貢進されるとともに、加えて四道將軍の派遣がおこなわれた際には、越国造による大量の碧玉製腕飾りが生産され、まさに碧玉製腕飾りの生産が重層的になされたものと推測されるのである。

以上述べたことからすると、大彥命を祖先とする七氏族は、四道將軍が派遣された際に、大彥命と膳臣、狭狭城山君、越国造が一チームを編成し、武渟川別と伊賀臣、阿閉臣が同様に一チームをなし、それぞれに筑紫国造が加担して北陸道、東海道へ派遣されたものと推測される。そして、このような四道將軍の東国への派遣を契機として、大彥命を祖先とする氏族相互の擬制的な同族関係が成立したものと理解されるのである。

おわりに

小稿は、近江の湖東に築造された雪野山古墳、安土瓢箪山古墳の被葬者の性格の検討を試み

たものである。日本の古代には、じつに多くの古墳が築造されている。しかし、その被葬者は、中国の墳墓のように墓誌を入れる慣習がなかっただけに、その被葬者の氏族名を明らかにするのは不可能に近いことである。しかし、その抛りどころが全くないというわけではない。古代文献に『古事記』『日本書紀』が編成されたが、推古以前の記事の信頼性が低いだけに、その抛りどころとしにくいものとなっている。

小稿では、そのように理解しながらも、あえて『古事記』『日本書紀』に記す大彦命を祖先とする七氏族の同族関係の伝承と、『日本書紀』崇神紀に記す四道將軍の記事を重視した。そして、大彦命、武渟川別を北陸道、東海道へ派遣したという記事をもとに、同族関係にある七氏族を被葬者と推測される有力首長墳に副葬された威信財をもとに検証を試みてみたものである。

その結果、雪野山古墳、安土瓢箪山古墳の被葬者は、いずれも四道將軍の大彦命が北陸道への派遣に際し、補佐する任務にかかわったものと推測した。このように、近江の雪野山古墳と安土瓢箪山古墳の有力首長が、二代にわたって四道將軍とともに東国へ派遣されたとなると、この派遣の内容は、『日本書紀』崇神紀に記すものとは少なからず異なり、数次にわたり、しかも艱難辛苦の過程をたどってなされたものであったと考える。

なお、小稿では主題からはずれるので、特に言及しなかったが、東国の地域で多量の碧玉製腕飾りが副葬された古墳の一例に、岐阜県大垣市の長塚古墳がある。全長82mの前方後円墳で、石釧79個と鍬形石3個が副葬されている（大垣市1977）。また琴柱形の玉杖形石製品1本が副葬された有力首長墳の一例に、静岡県磐田市の松林山古墳が知られている。この古墳は全長110mの有力首長墳である（後藤ほか1939）。これらの古墳の被葬者も、四道將軍が派遣された際に、それぞれの地域で一時的に副將軍的な職務を任じられた在地の有力首長であった可能性が少なくないように思われる。

さらに、『古事記』崇神段には、大毘古命（大彦命）と建沼河別命（武渟川別）の父子が相津で出会ったと記している。この会津には前方後円墳の会津大塚山古墳が築造されている。全長114m、東北で最大規模の首長墳である。南棺から三角縁二神二獣鏡、変形四獣鏡の2面の銅鏡が副葬されている（伊東ほか1964）。これらの銅鏡を会津大塚山古墳の被葬者が入手したのも、派遣された四道將軍の大彦命もしくは武渟川別らとの同盟関係の締結などによるものであった可能性が高いように推測する。

また、この四道將軍として吉備津彦や丹波道主命による西国や丹波への派遣に際しても、銅鏡・碧玉製腕飾りなどの威信財を入手し、副葬した首長が少なくなかったであろう⁽⁵⁾。

註

- (1) 細川修平氏は、雪野山古墳と安土瓢箪山古墳の築造時期を同時期と考え、その歴史的な性格を論じている（細川 1993）。しかし、墳丘、副葬品からみて同時期とみなしうる点は乏しく、発掘調査団の報告（都出ほか 1996）と同じく、雪野山古墳が先行して築造されたものとする。
- (2) 『日本書紀』では、推古 15 年（607）、推古 16 年（608）に小野妹子が遣隋使に任命された際、また推古 22 年（614）に犬上御田鍬が遣隋使として派遣、また舒明 2 年（630）にも遣唐使として派遣されたが、節を授けた記載はない。
- (3) 北條芳隆氏は、雪野山古墳の琴柱形石製品を、この類型の第 1 段階のものとしている。この琴柱形石製品の類例に静岡県松林山古墳出土のものがある（後藤ほか 1939）。その用途は、玉杖型の身分・地位を示す威信財と考えて間違いないものとする。
- (4) 2023 年 9 月 8 日付『朝日新聞』は、「銅鏡副葬 最多 100 面超」の見出しで、2009 年に桜井茶臼山古墳から 81 面の銅鏡が副葬されていたとしたが、銅鏡は 14 種あり、三角縁神獣鏡 26 面、中国鏡 10 種で 56 面、国産 3 種類で 21 面が副葬されていたと報じている。
- (5) 岡山市の備前車塚古墳から 13 面におよぶ銅鏡が副葬されているのは、吉備津彦を四道将軍の一人として西国へ派遣したことと関連するものと推測される。

引用・参考文献

- 伊東信雄ほか 1964『会津大塚山古墳』会津若松市史 別巻 会津若松市、福島
- 上田宏範ほか 1961『桜井茶臼山古墳 附櫛山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 奈良県教育委員会、奈良
- 梅原末治 1938「安土瓢箪山古墳」『滋賀県史蹟調査報告』第 7 冊 滋賀県、滋賀：pp. 1-45
- 大垣市 1977『大垣市史』青墓篇 大垣市、岐阜
- 大橋信弥 1996「蒲生稲寸について—近江古代豪族ノート 5—」『紀要』第 9 号 滋賀県文化財保護協会、滋賀：pp. 224-237
- 岡林孝作 1997「願興寺跡の発掘調査」『仏教芸術』235 号、大阪：pp. 110-128
- 小笠原好彦 2020「奈良県東大寺山古墳の性格と被葬者」『東三河の考古学—芳賀陽先生追悼論集—』東三河の考古学刊行会、愛知：pp. 69-79
- 金関 恕ほか 2010『東大寺山古墳の研究—初期ヤマト王権の対外交渉と地域間交流の考古学的研究—』東大寺山古墳研究会、奈良
- 河村好光 1989「碧玉製腕飾の成立」『北陸の考古学』Ⅱ 石川考古学研究会、石川：pp. 169-194
- 蒲生町 2000『蒲生町史』第 3 巻 蒲生町、滋賀
- 岸 俊男 1960「ワニ氏に関する基礎的研究」『律令国家の基礎構造』吉川弘文館、東京（後に岸『日本古代政治史研究』（塙書房 1966）に所収）
- 京都大学文学部博物館 1993『紫金山古墳と石山古墳』、京都
- 小林行雄 1952『福岡県糸島郡一貴山村田中銚子塚古墳の研究』便利堂、京都
- 後藤守一ほか 1939『静岡県磐田郡松林山古墳発掘調査報告』静岡県磐田郡御厨村郷土教育研究会、

静岡

佐伯有清 1981『新撰姓氏録の研究 考證篇 第一』吉川弘文館、東京

塚口義信 1997「桜井茶臼山古墳・メスリ山古墳の被葬者について」『日本書紀研究』第21冊 塙書房、東京：pp. 69-86

都出比呂志ほか 1996『雪野山古墳の研究』報告篇 雪野山古墳発掘調査団、大阪

伊達宗泰ほか 1977『メスリ山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第35冊 奈良県教育委員会、奈良

橋本澄夫 1990『日本古代の遺跡 石川』保育社、大阪

橋本達也 1996「雪野山古墳と近江の前期古墳」『雪野山古墳の研究』考察篇 雪野山古墳発掘調査団、大阪：pp. 255-292

福永伸哉 1996「雪野山古墳と近江の前期古墳」『雪野山古墳の研究』考察篇 雪野山古墳発掘調査団、大阪：pp. 293-308

北條芳隆 1996「雪野山古墳の石製品」『雪野山古墳の研究』考察篇 雪野山古墳発掘調査団、大阪：pp. 309-330

細川修平 1993「二つの前方後円墳」『紀要』第7号 滋賀県文化財保護協会、滋賀：pp. 1-26

挿図出典

図1～3：都出ほか1996

図4・5：梅原1938

図6：橿原考古学研究所附属博物館『巨大埴輪とイワレの王墓』

図7・10：上田ほか1961

図8・9：伊達ほか1977か

図11～12：金関恕ほか2010『東大寺山古墳と謎の鉄刀』雄山閣

図13：金関恕ほか2010

図14・15 京都大学文学部博物館1993